

立命館大学文学部は二〇一七年に創設九十周年を迎えました。十一月には盛大な記念式典が催行され、教員や在学生、そして多くの卒業生も集った祝宴も開かれました。文学部創設当初から講座を有していた日本文学専攻は、まさに文学部九十周年の生き証人ということができるでしょう。その歴史を支えた第一は、やはり多くの学生たちの存在です。少なくとも立命館大学にあって、文学部の存在意義や日本文学という研究分野の不要論が議論されることはあり得ない、それほどまでにその役割が認知され、その成果が敬慕されて九十年に至っていることに手前味噌ながら感涙を禁じえませんでした。次の十年もとどまることなく、在学生と卒業生を中心に、会員の皆様のご尽力で更なる発展を遂げることを祈念して已みません。

日本文学研究学域の近況をお知らせいたします。二〇一七年度末をもって任期を満了された中西健治先生が特任教授をご退職されました。制度変更によって、特任教授が学部所属となった

ため、大学院学生の指導に携わることが可能となり、中西先生にはご退職直前まで、博士學位論文の主査をお務めいただきました。また、教職大学院設置のため、短い期間ですが学域に所属されていた国語科教育担当の井上雅彦先生も朱雀キャンパスに移動されました。学域専攻制度も定着し、日本文学研究の多様性や可能性が周知のものとなった現在、二〇一六年度から文学部の共通科目として英語による開講科目が設置されています。留学生らに交じて日本人学生も奮闘しているのですが、ここでも中川成美先生や彦坂佳宣先生が授業を担当しておられます。「国際」を標榜する他の学域教員が科目担当を尻込みする様子を横目に、日本文学こそが最も国際的研究分野であり、発信力にも優れていることを再確認する機会になりました。大学院生の国際学会での発表も増えていきますし、何より留学生を多く抱える日本文学専攻は日常的な授業こそが国際的競争原理のなかで機能していると考えられます。今後もこうした方向性を堅持した

いと考えております。

学部では小集団教育の充実が図られ、卒業論文の個別指導が徹底される状況の中で、以前は隆盛を誇っていた学生部会の活動が衰退しているのは寂しい限りです。研究例会の充実には学部生と大学院生の連携が不可欠です。学部生の大学院科目早期履修制度である「大学院進学プログラム」も日本文学専攻・日本文化情報学専攻では多くの受講生を出しているものの、まだまだ周知は足りません。日本文学・日本文化情報学研究の可能性を広く学生に伝えるべく、不断の努力を続ける必要性を教員一同、日々痛感しています。

(中本 大)